

野菜



「オクラ」栽培耕種基準



野菜

宮内 勝幸

上島営農指導センター
080-2751-6373

月	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月		
	旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下		
作型	ハウス				○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	トンネル(直播)	ほ場準備			∩	—	—	○	—	○	—	∩	(除去)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
	トンネル(移植)	ほ場準備			∩	—	○	—	○	—	◎	—	∩	(除去)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
	露地										○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			

*備考・・・○：播種 ◎：定植 ∩：トンネル ■：収穫期間

1. 品種 ブルースカイZ

2. 播種・定植

- ・地温が15℃を確保できたら播種・移植する。無理な早播きは発芽率の低下や苗立枯病に大きく影響する。
- (直播)1穴当たり5～6粒播き。指先で軽く鎮圧し、無病の土(育苗培土や赤玉土など)で被覆する。深播きに注意。
- (移植)セルトレイ2穴分(苗6本分)を植穴1つに植え、根回し灌水を行う。
- ・移植後又は直播では発芽後、タチガレン液剤(500倍)を株元灌水し苗立枯病を予防する。

3. 育苗管理(移植栽培の場合)

床土はプラグ専用倍土を使用し、入れムラのないようよく鎮圧する。トレイは128穴のプラグトレイを使用。1穴3粒播き。

- 注意点
- ①播種は深まきを避け、播種後充分灌水し、水を切ってから重ね黒ビニール等をかけて保温する。
 - ②発芽適温は25～30℃。10℃以下になるとほとんど発芽しないため低温には注意する。
 - ③発芽後トレイを広げるが、低温に遭遇すると苗立枯病を起すため、ベンチ育苗を行う。

4. 本圃の準備

- ・圃場は日当たりが良く、センチュウに汚染されていない排水良好な圃場を選ぶ。
- ・播種・移植まで余裕をもって土壌水分が良い時に畝立を行う。
- ・梅雨期の栽培となるため、額縁明渠など排水対策は万全にし、高畝にするなど長時間浸水しないようにする。
- ・管理、作業を考慮し、通路はなるべく広く取れるようにする。
- ・基肥の施用が多すぎると初期生育が旺盛となり着果が遅れるため注意する。特に、前作が野菜の場合は注意(残肥が多いため)。レタスの後作の場合は基本無肥料)
- ・トンネル栽培では、地温の確保のため早めに設置し、移植までに15℃以上を確保する。
- ・施肥量(前作が何も栽培されていない場合)

肥料名	袋数	kg	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
(基肥)堆肥		2,000			
ベスト444	2	40	5.6	5.6	5.6
(追肥)アサヒエース等	草勢を見ながら1回N成分で1～3kg/10a 10日置き程度				

(栽植様式)

	畝幅	株間	条間
1条植え	90cm	18～20cm	—
2条植え	135cm	22～25cm	35～40cm

5. 本圃の管理

- ・本業展開後、斑点細菌病・葉枯細菌病の防除を行う。(5月上旬)
- ・(トンネル栽培)外気温が15℃以上になる5月上中旬頃、徐々に慣らしながらトンネルを除去する。(トンネルや畝が乾燥した高温の状態一度に開けると葉焼けを起こすので注意する)
- ・本業3枚目で葉に切り込みが入ってくるくらいがベスト。茎径が大きく、本業4、5枚目が丸葉の場合、マルチ赤等で生育を抑制する。
- ・草勢に応じて着果前後で1回目の追肥。草勢が強い場合、追肥すると落果の可能性がある。その後は草勢を見ながら追肥する。(施肥例:N成分1～3kg/10a 10日置き)
- ・着果が開始し、梅雨に入る前に果実黒斑病の予防防除を行う。以降、台風前後や大雨前後に行う。
- ・畝内の水分変化が大きいと果実黒斑病等の病気の発生や生育に影響が出やすいため、乾燥が続く場合は灌水を行う。(滞水しないのであれば、畦間灌水でも可能)
- ・草勢を見ながら摘葉を行う。特に生育初期に草勢が強い場合は、着果位下まで摘葉し草勢を抑える。
- ・早期水稻の稲刈り等農繁期で手が回らない場合は、地上部50～60cmほどから切り返し、1穴当たり5～6本の側枝を残す。(時期は7月下旬まで)

6. 台風・大雨対策

- ・梅雨に入る前までに、排水対策を再度確認する。
- ・風対策として、畝の両側に約2m間隔で支柱を立て紐を張り倒伏を防止する。また台風等強風が予想される場合は、紐等で数株ずつ絞り込んで固定する。
- ・大雨や台風通過後は葉面散布や発根剤で株の回復を図る。

7. 収穫・調整

- ・取り遅れがないよう、出荷規格内の長さで収穫する。できるだけ午前中に収穫する。7月後半～8月の高温期は1日1回では取り遅れる場合がある。その時は朝夕2回収穫する。
- ・収穫後は、日陰の風が通る場所で蒸れを防止し、切り口を乾燥させるために広げる。
- ・袋詰めした後も夜温が高い場合は、段ボールの上を開けた状態で重ねず風通しを良くする。あるいは出荷直前に箱詰めする。
- ・箱詰め後は、ムカデ等の混入に注意する。(床に直に置かない・壁寄せて置かない 等)

果樹



12月・R6年1月の柑橘園管理



果樹

原口 悠貴

下島営農指導センター
080-2725-7775

1. 病害虫防除

	対象病害虫	防除時期	農薬名	希釈倍数	水1000ℓ当たり使用量	使用回数	収穫前使用可能日数
温州	貯蔵病害	収穫前	ベンレート水和剤 混用	4,000倍	25g	4回以内	前日まで
			ベフラン液剤25	2,000倍	50ml	3回以内	前日まで
	越冬害虫	12/下～1月/中	ハーベストオイル	60倍	1,667ml	—	—
中晩柑	貯蔵病害	収穫前※	ベンレート水和剤 混用	4,000倍	25g	2回以内	前日まで
			ベフラン液剤25	2,000倍	50ml	2回以内	前日まで
			ベフトップジンフロアブル	1,500倍	67ml	2回以内	前日まで

※ベフラン液剤25とベフトップジンフロアブルは同成分を含むため合わせて2回までの使用となります。

2. 葉面散布

○収穫が終わった品種は樹勢回復対策を行きましょう。

資材名	使用回数	備考
尿素 又は 神協スピリッツ 又は アミノジュース-N14	500倍	いずれかを使用し、収穫後3回以上集中散布を行きましょう。

3. へた落ち防止対策

収穫から長期間貯蔵を行う品種では、へた落ち防止の為散布を行きましょう。また、すでに河内晩柑等でマデックEWを使用した園では使用する事ができませんのでご注意ください。

対象品種	農薬名	希釈倍数	収穫前日数	使用回数
かんきつ	マデックEW	2,000倍	20～10日前まで	1回

花卉



トルコギキョウの冬季計画生産のための考え方



花卉

竹川 慶剛

上島営農指導センター
080-1729-1637

【トルコギキョウの開花特性と冬季開花の環境調節】

- ・トルコギキョウは北米大陸原産で、自然環境下では夏に開花する植物です。
- ・花芽分化と発達、高温、長日、高日照条件で、促進されます。
- ・冬季出荷は、低温、短日、低日照条件のために花芽分化の遅れや発達の停止(プラスチック)が生じやすい作型です。
- ・冬季開花の作型では花芽分化と発達を促進する環境調節が必須です。

【冬季開花の光合成環境の特徴】

・冬は昼が短く、日射量が夏の半分と少ないため、1日当たりの糖の生産量は夏と比較して約半分に減少します。

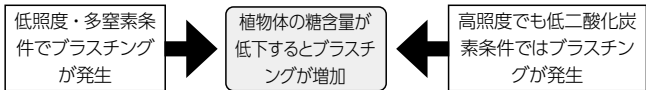
・トルコギキョウは、冬の晴天日の光強度と大気二酸化炭素濃度下では、葉温25-30℃で光合成速度が最大になります。そのため、日中のハウス内温度も25℃を超えない場合は、さらに光合成速度が低下します。



(光合成の仕組み)

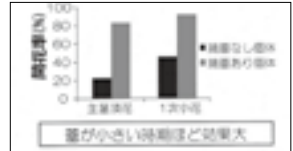
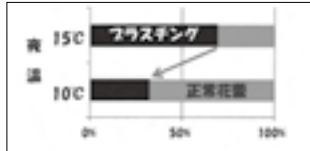
- ・光合成とは、水と二酸化炭素を原料として、光エネルギーで糖を合成する化学反応です。
- 糖(光合成同化産物)は植物体の材料となり、切り花のボリューム増加のために利用されます。
- ・光合成速度を決める環境要因は、水、二酸化炭素、光強度、葉温です。
- ・二酸化炭素濃度や光強度が低下するほど光合成速度が低下します。水欠乏は葉の気孔を閉鎖させ二酸化炭素の取り込みを阻害します。

【プラスチック発生と糖の関係】 プラスチックとは…胚珠(種子のもと)が分化せず、蕾の成長が止まる現象



【プラスチック回避のポイント】

- 花芽分化や蕾の発達を促進する。
 - ①白熱灯で長日処理を行う。
- 光合成を促進する。
 - ①太陽光を最大限取り込む。 ②光の強い時間帯は25℃以上。
 - ③換気(外気導入)、二酸化炭素施用を行う。
 - ④葉が萎れるほど水切りしない。
- 糖の消費を防ぐ
 - ①多窒素条件にしない。 ②夜温を10℃程度に下げる。
- 余分な蕾や枝をその成長初期に切除



【品種についての考え方】

- ・低コスト計画生産を実現させるためには、出荷率(製品率)が高いこと、出荷時期がそろうことが大前提です。そのためには、
- ・初期生育が優れ、花芽分化の揃いが良い品種。
- ・プラスチックの発生が少ない品種の選択が必要です。
- ・品種選択の基準の一つである「早晩性」では、早生～中早生が該当します。
- ・プラスチックの発生のしやすさには品種間差がありますが、早晩性や花の大きさとの相関はありません。

栽培圃場の光環境や栽培技術によって、安定的に栽培可能な品種の範囲も異なります。個別に比較検討して、品種選定を行ってください。

ジャンボインゲン出荷ピーク

JAあまくさ管内ではジャンボインゲンの出荷が11月下旬からピークを迎えました。秀品L(24匁～30匁)をメインに日量約200箱(1箱2^{kg})を主に関西方面へ出荷。ジャンボインゲンは1箱が2^{kg}と他の作物と比べ軽く、出荷作業が軽減され収穫しやすい。つる性のため座らず立って収穫でき、高齢の方も体への負担が少ないため、管内では約16年前から取り組んでいます。

品種はその名の通り「ビックリジャンボ」。平さやで、長さ約20匁～30匁、幅2.5匁と普通のインゲンの数倍以上の大きさ。令和5年度は10戸95^{ha}のほ場で27^tを計画しています。



インゲンの数倍あるビックリジャンボインゲン

イチゴ出荷査定会で意思統一を!!

園芸部会イチゴ専門部会は11月30日、上島集送センターでイチゴ出荷査定会を開き、本格出荷の前に、2023年産の出荷規格や今後の管理について協議しました。査定会には生産者や市場関係者、JA職員ら約20人が集まり、市場の情勢報告や現物査定を行いました。現物査定は、管内のイチゴを確認しながら着色や形、大きさやパックの詰め方などについて意見を交わし意思の統一を図りました。

部会では11月中旬から5月まで長期的な出荷を見込んでおり、23年度出荷数量47.6^t(前年計画対比104%)、販売高6918万(同比112%)を目標に掲げています。



出荷規格について確認する部会員ら